Nara Women's University

アジア・ジェンダー文化学研究センター2019年度の活動

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 奈良女子大学アジア・ジェンダー文化学研究センター 公開日: 2020-07-16 キーワード (Ja): アジア・ジェンダー文化学研究センター, シンポジウム, 年度活動 キーワード (En): 作成者: 「アジア・ジェンダー文化学研究」編集委員会 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10935/5486

Gender and Culture in Asia
アジア・ジェンダー文化学研究センター

2019年度の活動

主　催

●研究助成公募「アジア・ジェンダー文化学研究センター 2019年度　研究課題・研究集会」

募集期間:2019年3月15日（金）～3月29日（金）
採択者・テーマ：
武輪敬心氏
10代（おおむね高校卒業未満）で妊娠・出産した女性のライフコースに関する研究

亀山恵理子氏
映画に描かれた東ティモール女性の紛争経験と記憶－『ベアトリスの戦争』、『決断』、『メモリア』の制作過程に関する聞き取り調査を中心に

飯田愛紀氏
女性の経済活動・キャリア形成を妨げる伝統的ジェンダー・レジームの解明－日本・ハンガリー比較研究－

波多野綾子氏
ジェンダー暴力とセクシャルハラスメントに関する国際比較研究：国際法の国内化の観点から

●クロストーク・イベント

「妊婦」の表象－語られる妊娠／眼差される妊娠－
講演者：
藤木直実氏（東京学芸大学、二松学舎大学、日本女子大学、法政大学・同大学院非常勤講師）
小林美香氏（東京工芸大学非常勤講師）
日時・場所：
6月15日（土）10：00～12：30
生活環境学部E261教室

★公開シンポジウム

オーラルヒストリーとジェンダー研究
講演者：
游鑑明氏
（台湾中央研究院近代史研究所兼任研究員）
日時・場所：
6月18日（火）15：30～17：30 文学部N棟N339

★台湾研修

参加学生：
奥山怜以（生活環境学部４回生）
野末楓夏（生活環境学部３回生）
細井清花（生活環境学部２回生）
森本日菜子（文学部２回生）
日程：9月8日（日）～9月12日（木）
場所：台湾・台北市周辺

★国際シンポジウム「女性・文学・歴史」

講演者：
Martine Reid氏（フランス・リール大学教授）
飯田祐子氏（名古屋大学教授）
白水紀子氏（横浜国立大学名誉教授）
日時・場所：
11月22日（金）13：30～17：30
共催：奈良女子大学文学部言語文化学科（「ジェンダー言語文化学プロジェクト」）

★ジェンダー講読セミナー

ジョルジュ・サンド『ガブリエル』を読む
講演者：
髙岡尚子氏（奈良女子大学教授）
坂本千代氏（神戸大学教授）
Martine Reid氏（フランス・リール大学教授）
日時・場所：
11月27日（水）16；20～17：50
文学系S棟S230講義室
共催：文学部言語文化学科「ジェンダー言語文化学プロジェクト」

★ミニシンポジウム

関係性の世界史－ジェンダー視点から問う文化と身体
講演者：
河上麻由子氏（奈良女子大学准教授）
中山文氏（神戸学院大学教授）
永原陽子氏（京都大学教授）
香川檀氏（武蔵大学教授）
日時・場所：
12月14日（土）13：00～17：30
生活環境学部A棟1階生活環境学部会議室
主催：比較ジェンダー史研究会［科研費基盤研究（A）「ジェンダー視点に立つ『新しい世界史』の構想と『市民教養』としての構築・発信」研究代表者：奈良女子大学・三成美保］
共催:科研費基盤研究（A）「イスラーム・ジェンダー学構築のための基礎的総合的研究」（研究代表者：東京外国語大学・長沢栄治）研究会、科研費基盤研究（B）「東アジアにおける家族とセクシャリティの変容に関する比較史的研究」（研究代表者：日本大学文理学部・小浜正子）研究会

★国際シンポジウム

アジアから問うジェンダー史
－世界史を読み替える－
講演者：
Gail Hershatter氏（カリフォルニア大学教授）
落合恵美子氏（京都大学教授）
小野仁美氏（東京大学研究員）
宇野伸浩氏（広島修道大学教授）
川島啓一氏（同志社中学校・高等学校）
桃木至朗氏（大阪大学教授）
日時・場所：
12月15日（日）10：00 ～ 17：00
文学系Ｓ棟２階　S235教室
主催：比較ジェンダー史研究会［科研費基盤研究（A）「ジェンダー視点に立つ『新しい世界史』の構想と『市民教養』としての構築・発信」研究代表者：奈良女子大学・三成美保］
共催：科研費基盤研究（A）「イスラーム・ジェンダー学構築のための基礎的総合的研究」（研究代表者：東京外国語大学・長沢栄治）研究会、科研費基盤研究（B）「東アジアにおける家族とセクシャリティの変容に関する比較史的研究」（研究代表者：日本大学文理学部・小浜正子）研究会

★「2019年度　第14回　女性史学賞授賞式」

受賞者・受賞作：
北村紗衣氏
『シェイクスピア劇を楽しんだ女性たち
－近世の観劇と読書－』　白水社
日時・場所：
1月11日（土）13：00 ～ 15：40
奈良女子大学記念館講堂

●第５回　アジアを知ろう

台湾研修　報告会
報告者：
日時・場所：
1月17日（金）15：00 ～ 16：30
コラボレーションセンターZ103

共　催

●講演会

左翼運動と女性作家－雑誌『女人芸術』にみる運動の周縁
講演者：
笹尾佳代氏
（神戸女学院大学文学部総合文化学科准教授）
日時・場所：
12月９日（月）14：40 ～ 16：40
文学系Ｎ棟N201講義室
主催：奈良女子大学文学部言語文化学科
共催：神戸女学院大学女性学インスティテュート

●第21回奈良女子大学社会学研究会

インターセックス/DSDの現状と課題：名称の変遷と当事者におけるフィードバック
講演者：
入江恵子氏（九州国際大学准教授）
日時・場所：
12月14日（土）13：30 ～ 17：00
奈良女子大学Ｆ棟５階大会議室
主催：奈良女子大学社会学研究会

★のイベントについては、次ページ以降で内容の紹介をしています。

Taiwan 台湾研修研修
（2019年９月８－12日）

センターでは、学生の教育・研究活動を推進するために毎年アジア研修を主催している。今年は、学生４人に教員２人が同行して台湾・台北市周辺で研修を行った。今年の研修は台湾の医療の現状、文化、LGBT推進の状況について知ってもらうために、前半は医療施設や脱医療化をめざすNGO団体との交流に取り組み、後半には台湾大学の学生との交流を行った。

台湾は病院やクリニックなどが街中に林立し、医療の存在が当たり前になっている。とくに妊娠・出産の際には、ほとんどの人が病院でNIPT（新型出生前診断）をはじめとする種々の検査を受け、出産に至ることがほとんどである。しかし、このような医療ケアは果たして必要なのか、むしろ過剰な医療が患者に提供されているのではないかを考える必要がある。このような疑問を抱え、前半の研修では台北市内で人気のある産婦人科医療施設を見学した。そこではより良い医療を提供するために、妊婦専用のアプリなどを開発し、検診の結果が全てアプリにもきちんと保存されるようになっている。また、日本の大手メーカーと契約して、女性や新生児が必ず使う産褥パットなどの商品（おむつ、哺乳瓶、おくるみ、退院時の洋服など）をプレゼントとして提供していた。学生たちは、最新の医療施設で提供されているさまざまなサービス内容を目の当たりにして、非常に驚いた様子であった。

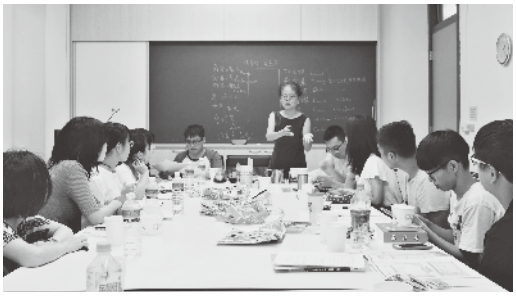
また、台湾では妊娠・出産を経た後に、女性たちは独特の産後養生文化（坐月子）を守っている。日本では、出産の後に女性は実家や自宅で安静にするのに対して、台湾では産後ケアセンター（産後護理之家）で休養する習慣がある。このような産後養生文化を知ってもらうために、上で見学した産婦人科クリニックと同じ系列の産後ケアセンターを訪問した。このセンターでは母子がゆっくりと休養できるように、部屋には工夫を凝らした設備や細かいところまで気を配った物が置かれていた。例えば、出産の直後に身体に痛いところがある女性のために、高さを自動で調整できるキングサイズのベッド、哺乳瓶と搾乳機を消毒するための最新の装置、空気清浄機能付きのエアコンやシャワー室前の暖房などがあった。また、女性たちが毎日使うボディーソープやシャンプーなどは高級ブランドのブルガリ製で、新生児たちの体に巻くおくるみも日本の大手メーカーのものであった。これらの紹介を聞きながら、学生たちは大いに感心し、驚いた様子だった。

後半の研修では台湾大学を訪問し、社会学を専攻している学生たちと交流を行った。４人の学生たちは、台湾の医療の現状、LGBT推進の課題、ジェンダー平等の状況などについて事前に日本で発表を準備し、あらかじめ質問を用意していた。台湾大学では、通訳を介さずに英語と日本語でディスカッションを行うことによって、学生同士の交流を深めることができた。その後、台湾のLGBT団体のところへ行き、アジアで初めて同性婚を実現した理由とそのプロセスなどについて話を伺った。

今回の研修では、同行した大平幸代先生の専門が中国の歴史学だったこともあり、学生たちは台湾の独特の文化や習慣を理解でないときに、先生はすぐに丁寧に説明してもらうことができた。そのおかげで学生たちは限られた滞在時間の中で良い刺激を受けることができたと思う。こうした研修・交流を通じて、

学生たちは広い視野と知識を身につけることができ、今後研修で得た経験と知識をそれぞれの場で学習に活かしてくれるものと考える。その意味で、今回の研修は非常に有意義であった。

（曾 璟蕙）



Taiwan

台湾研修（2019 年 9 月 8 － 12 日）

▼ 奥山怜以（生活環境学部生活文化学科）

LGBT の認知度・理解度を深めるには－台湾の人々との交流を通して－

私は就職活動を通して、LGBT の人々が抱える職場の問題に興味を持った。そして日本では LGBT の人々は職場で問題を抱える場合が多く、転職を繰り返すことで貧困につながる等の解決すべき問題が数多く存在することを知り危機感を抱いた。その根本的な解決のためには、周囲の理解が欠かせないと考えている。そこで昨年同性婚を可能にする法案が可決された台湾では、どのように LGBT に関する正しい理解や認知度向上がなされたかを知るため本研修に参加した。

研修では台湾大学を訪問し、LGBT に関して高い関心を持つ社会学部の学生との交流を行った。また奈良女子大学の学生 4 人と、台湾大学の学生 1 人が、自身の関心のあるテーマについてプレゼンテーションを行った。私は「LGBT の人にとって働きやすい職場とは？」をテーマとした。日本の職場における LGBT の理解度の低さや、そこから生じる差別的言動の多さなどを中心に取り上げ、理解度を深めるために企業に求められる取り組みについて発表をした。その発表のフィードバックで、職場環境に関する問題は非常に重要だが、まずは法律が必要なのではないかといった意見を学生と台湾大学の先生に頂いた。

日本では LGBT に関する差別的発言はセクハラにあたることになったが、それが機能しているとはいえず、依然として差別的発言がある。そのため私は企業が従業員に対して行う取り組みが今後必要であると考えていた。それゆえ他の法律を求めるという台湾の方の考えに少し驚いたのだが、議論を進めていく内に、その考え方の違いはそれぞれの国民性から生じるのではないかと考えた。それが最も表れたのが、「奈良女子大学におけるトランスジェンダー学生の受け入れ」について意見交換した際である。本学の学生がハード面の整備の遅れ等を不安視していた一方で、台湾大学の方は肯定的な姿勢で、問題が生じてもその都度解決策を講じることが大切だと述べていたことが非常に印象的であった。

しかし後日訪問した、LGBT 団体の『TAPCPR』でお話を聞き、第一に法律を求めるのは国民性の違いだけから生じるものでないことに気付いた。TAPCPR は 2009 年に設立され、同性婚を可能にするために尽力した団体である。2011 年から同性婚に関する法律を作ることを目指し始め、実際に法案が可決されるまでに多くの困難があったことを伺った。TAPCPR の代表によると、運動を始めた当初は人々の関心は薄かったが、反対派によって LGBT に関するデマを流されたことで、不安感から多くの人々が反対するようになってしまった。そのため司法院大法官会議で、同性婚の拒否が「違憲」とされたのにも関わらず、国民投票で否決されてしまったのだ。そのため新たに同性婚を認める法律を作ること目指したのだ。デマによって LGBT に誤った認識を持つ人たちの誤解を解くことから始め、そして 2019 年にようやく法案が可決されたのである。

この一連のお話を聞いて、法制化を目指すこと、それ自体が議論を巻き起こすために、国民の認知度が進むことに繋がることを知った。国民性だけでなく、この一連の流れを経験してきてい

るからこそ、台湾の方は第一に法制化を考えるのだろう。台湾大学と TAPCPR への訪問により、これまでの自身の考え方を改めるきっかけとなった。

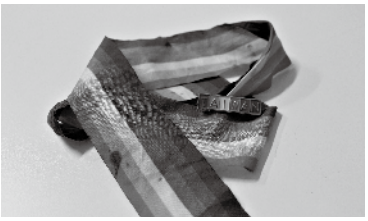
また別の日には、本研修のもう一つのテーマである医療社会学のため、産婦人科のクリニック・産後養生施設の見学と、脱医療化団体との交流を行った。その２つの団体は、女性の妊娠・出産において全く正反対のことをしている印象を受けた。

台湾では帝王切開の割合が、諸外国と比べ高いと言われている。クリニックを見学している時にも帝王出産を終えた妊婦がおられた。実際にその様子を目の当たりにすると、この女性はお腹に傷をつける必要はあったのかなどと考えてしまった。クリニックと産後養生施設には出生前診断等、最先端の医療・設備が揃っていた。

脱医療化団体の方は、このようにして医療が商品化され、妊婦に選択肢がほぼ存在していない過度の医療化を変えようとしている。「生育を変えよう」という目的のもと、法制化を目指し活動しているのだ。団体のメンバーは助産師を始め、助産師に出産を手伝ってもらった主婦・記者・映画監督など様々な職業の方がいた。団体のメンバーは、医師の態度に不信感抱いたことや、二人目の出産では帝王切開を避ける方法を探したことによって、助産師の存在にたどり着いたという。

台湾には 137 人の助産師の方がおり（2019 年９月９日時点）、これは９年前の２倍だ。そのため年々脱医療化についての情報を得やすくなっているのである。しかし依然として、病院以外での出産は家族の理解を得るのが難しいそうだ。お話を聞いた５人のうち４人が、助産師に出産をみてもらうことを家族に事前に言わなかった。反対に遭うだけで、言える状況にないからである。命の危険を伴う出産において、女性達の選択を阻害する風潮があるのは非常に問題があり、新しい生育の形の実現ために人々の理解を深めることが必要だと感じた。

４泊５日の研修を通して、個人の選択を阻害する風潮がある場合に、法制化によってそれを保護すると同時に、周囲の理解や認知度を向上させることが重要だと学んだ。そして本研修を終え、日本でも同性婚を可能にする法律をいち早く作るべきだと考えるようになった。特に若者の政治的関心の薄さなどから、台湾と同じように事は運ばないだろう。それでもまず行動し、少しずつ前進させていく姿勢も台湾の人々から学ぶべきである。



「使い込まれたレインボーカラーのグッズ」
交流した台湾大学の学生達が、様々なレインボーカラーのグッズを身に着け通学していたことが印象的であった。

▼ 細井清花（生活環境学部生活文化学科）

人間の生活への医療介入はどこまで許されるのか

私は大学入学後、医療社会学という分野に興味を持った。特に、発達障害のような内面的な病気や障害の医療化・脱医療化についてその経緯と背景、正当性といったことに関心がある。かつては病気とされたことがやがて個性として受け入れられるようになったり、「少し変わった人」という「個性」であったものが「病気」とされるようになったりと、身近なところにも医療化・脱医療化ということは起こっている。「病気・障害」と「個性」との線引きはどうあるべきなのか。

それが私にとって最大のテーマである。しかしながら現在、本学において医療社会学を学べる環境は整っていない。そのような状況の中、対象とするものは妊娠・出産・産後と私の本来の関心とはやや異なるものの、この台湾研修で「医療化・脱医療化」といったことが取り上げられていることは運命のように思えた。また、性的マイノリティに関しても「病気」から「個性」という脱医療化を遂げ（人々の中ではまだ完全ではないが)、その一方でその「個性」を尊重するため、自分らしく生きるためにホルモン治療や性別適合手術といった医療介入が行われている。これは医療社会学的な視点から見ると非常に不思議な位置づけにあると私は思っている。色々な立場の方の声を聞き、特に当事者や高い問題意識を持つ方からお話を聞ける機会は日常生活の中ではそう出会えるものではない。参加しない理由はないと感じ、この台湾研修への応募を決意した。

まずこの研修で目にした台湾の産科医療は非常に極端な例であったことを断わっておきたい。クリニックの訪問では、最高レベルの医療によって完全に医療化された妊娠・出産を目の当たりにした。クリニックでは有名な医師を雇い、受けられる医療も最高レベルであることを前面に押し出していた。アプリを利用してお母さんや家族が家からでも健診結果やスケジュールを確認できる仕組みや「胎児ドック」という日本では聞き馴染みのない出生前の検診など、日本でも普及されれば便利であろう技術も多く見られた。しかしここで問題であるのは、それが女性やその家族にとって選択肢の 1 つではなく決められたものとなってしまっていることである。これは脱医療化団体の方々のお話の中でも触れられていた。私はクリニックで聞いた「無痛分娩が自然分娩の 9 割」という言葉が忘れられずずっと引っかかっている。その言葉にも表象されるように、そこでは医療ありきの出産というものが当然なのであって、医療の介入しない出産という概念がないのである。そして多くの女性たちは何の疑問も抱かずそれを享受している。女性たちに選ぶ権利がないということは不気味に感じられてしまうが、何より自分たちに選択肢と選ぶ権利があるはずだということを彼女たちは知らないのである。日本でも無痛分娩や帝王切開といった医療の力を借りた出産もだんだん主流になりつつあるが、それでも医療介入なしの本来の意味での自然分娩を望む女性や家族は珍しくない。また、産む場所も選択することができる。ところが台湾には助産師がほとんど働いていない。そのため助産所での出産や自宅出産を選択するケースはほとんどなく、そもそも選択肢としての位置づけですらないように思われた。助産師が出産に携わらないことで、本来医療が介入する必要のない正常な出産や妊娠・出産に伴う体の変化まで医療の対象とされてしまっているのが現在の台湾における産科医療の傾向だ。台湾の帝王切開の割合は約 35％だそうだが、WHO の発表によると帝王切開の適応するケースは 10 ～ 15％とされ、数値からも医療介入が過剰であることは容易に想像がつく。多くの出産が女性の身体的な負担に配慮されることもなく、人工的でマニュアル化された流れに乗せられてしまうことには恐怖と嫌悪感すら抱いてしまった。そしてその背景には医師に偏ったパワーバランスと、商業ベースに乗りすぎた医療の現状があるということを脱医療化団体の方に伺った。

次に、クリニックと同系列の産後療養施設では、これでもかというほどの高級志向と徹底的に整備された設備を見せつけられた。ブルガリの石鹸に、施設を経営するなでしこグループのマークがついた数々のグッズ、30 万円のソファなど、「出産で心身ともに疲れた産婦を癒すため」という範疇を超えているように思えた。また、来客があった際はその都度 30 分かけて部屋の清掃・消毒を行っているほか、トイレも含む施設で使う全ての水が一度沸騰させた水であるなど、出産

後弱った産婦を守るためという名目で徹底的に外界とは遮断された空間である印象を受けた。正直「そこまでするか」と思ったのであるが、帰国後の報告会で「それをよしとする背景には日本とは違った文化や価値観があるのだ」という助言をいただき、自分の「そこまでするか」という印象はエゴなのかもしれないと考えさせられた。近年日本でもホテルのような豪華な産院や療養施設が登場しているし、今回訪問したクリニックや産後療養施設の利用者の中には日本からやってくる女性もいるという。そう考えると、なでしこグループのクリニックや産後療養施設が「やりすぎ」であると感じる違和感や不気味さは、台湾の多くの女性にとっては抱きようのないものであるのかもしれない。しかしその一方で、脱医療化団体の女性たちのように自然に近い出産を望ましいとして、適度な医療介入を求める立場をとる人もいる。さらには日本の女性にも、そこまで徹底されている方が安心だと考える人もいるということも忘れてはいけない。文化や伝統による価値観はその国や社会においてすら普遍的なものではない、あるいは個人差があって当然であるということに気付かされた。ゆえに、「医療介入がどこまで許されるか」という問いに関してはそう簡単には答えが出せそうにない。ただ一つ答えに近づけたとすれば、それは医療を受ける側に決定権があるのではないかと考えるようになったことである。今回の場合で言えば、望む出産のあり方がそれぞれで異なるのであれば、それを叶えるためにはそれぞれに応じた医療介入があるべきで、それこそが正解なのかもしれない。だからこそ、異常な医療介入を避けるという点では、女性やその家族は自発的な情報収集を怠ってはならないし、医療者側もなるべく多くの選択肢を与えるよう努めるべきであるのではないだろうか。医療は本来ビジネスのツールになってはならないはずで、富める者ばかりが享受できるものであってはならないはずである。今回極端に商業ベースに乗った医療を見たことにより、改めて医療のあるべき姿を考える機会になったことは間違いない。

今回台湾研修に参加して最も強く感じたことは、教室で椅子に座り一方的に受け取るだけの知識とは違う「生きた学び」の面白さだ。「百聞は一見に如かず」と言うが、まさにそれを実感した。教科書には載らないような色々な人の思いや苦労、苦悩。そしてその場にいなければ分かりえない空気感。そういったもの１つ１つが自分の引き出しを増やしてくれたと感じている。そして、言葉が通じない歯がゆさと自分の勉強不足・努力不足をいやというほど痛感した。相手の言葉をそのまま理解し、自分の考えをそのまま伝えられるということがどれほど価値のあることかを思い知らされた。今後は、授業の枠を超えて自分から学ぶ姿勢を大事にしていきたい。そして外国語習得にもさらに力を入れ、今回知った悔しさをバネに精進していきたいと思う。このような今後への新たな目標や決意を抱くきっかけをいただけたことを心から感謝している。５日間という短い期間ではあったが、非常に充実した研修であった。

「台湾の医療に依存した産科医療について脱医療化を訴える女性たちと」

▼ 森本日菜子（文学部言語文化学科）

セクシャルマイノリティに対する意識変化

はじめに、研修に参加する前の認識を説明する。私は、日本はセクシャルマイノリティに関して理想と現実に差があると考えていた。日本では、女性同士や男性同士の恋愛を描いた漫画やドラマは人気が高く、昨年は映画化されるほどであった。しかし、現実は作品のように寛容な社会であるのかという疑問を抱いていた。また、アメリカ版 Facebook では 50 種類以上の性別の選択肢があるにも関わらず、日本版では男女の 2 種類とカスタムという記入式のものしか存在しない。カスタムで自由に自らの性を記入できるという考え方も可能であるが、男女以外を記入式にさせることでマイノリティを強調しているという見方もできる。一方で、台湾は 2019 年 5 月に同性婚を認める法案が可決されている。そのため、私は当初、台湾は日本よりも平等化が進んでいると認識していた。アジアで初めて同性婚が認められた台湾で、LGBT 団体の努力や成果を知り、理解を深めたいと思い、この台湾研修に参加した。

以下から、台湾におけるセクシャルマイノリティに関連した平等についての認識の変化を、現地で特に印象的だった 3 つと絡めて述べる。

1 つ目に、台湾大学の学生との交流会である。台湾大学に入ってまず驚いたことは、すべての性別の人々が利用できるトイレ「All Gender Restroom」が設置されていたことである。トイレの表示も日本にある赤と青のピクトグラムではなく、文字と紫色の便器の表示のみで誰でも出入りしやすい雰囲気を持っていた。さらに、学生との交流会では大学に「GayChat」や「The BDSM Club」などという LGBT に関係したサークルがあることや、男性が一か月間スカートを着るイベントが開かれていたことを知った。また、交流の場に出席したほとんどの学生がレインボーカラーのグッズを着用しており、学生自身が意欲的に発信していることが伝わってきた。大学施設の見学やサークル設立、イベント開催の話題を通じて、個人にとどまらず大学を巻き込んで積極的に LGBT 問題に取り組もうとする姿勢を感じた。加えて、イベントなどはネットニュースにも取り上げられたことがあり、個人を核として、大学の外にまで学生の意識が浸透していると感じた。私は、台湾大学の学生と交流したことで、当初の「台湾は日本よりも平等化が進んでいる」という認識がより一層強まった。

しかし、その認識は徐々に変化していった。交流会の後に、二二八和平公園と西門紅樓を見学した。二二八和平公園はゲイの人々の出会いの場であり、主に屋外の劇場、トイレ、朱色の建物に多く集まると教わった。さらには、以前は近くにある別の場所が出会いの場であったが、警察の取り締まりが強化されたため、二二八和平公園に集まるようになったと説明を受けた。台湾の平等化が進んでいるとはいえ、出会いのための場は存在することが分かった。公園を訪れた時間帯が夕方だったこともあり、特に男性が多いという印象は受けなかった。しかし、男性同士がベンチで話をしている姿を見たとき、「出会いの場」という言葉が頭をよぎった。日本では、男性同士が会話をしていても「出会いの場」という言葉が浮かんだことはなかったため、私は無意識に「男性同士の恋愛はあまりない、少ない」と差別していたのではないかと感じた。また、西門紅樓も以前は映画館だったため安価で暗く、ゲイの人々の出会いの場であったとされている。現在は雑貨店が集まる場所であり、明るく入りやすい雰囲気であった。西門紅樓にも「All Gender Restroom」があり、周辺にはレインボーカラーの旗を掲げている店舗が多く存在した。

日本ではレインボーカラーが目立つお店が並んでいる光景をあまり見ないため、このときは非常に新鮮だと感じた。しかし、研修から帰国し最寄り駅の近くの自動販売機を見たとき、広告がLGBT 行進のプライドだったことに気が付いた。今まで広告を気にしたことがなかったが、私が認知していなかっただけだと痛感し、認識の低さを再確認した。

そして最後に、TAPCPR（Taiwan Alliance to Promote Civil Partnership Rights）である。TAPCPR は、政府の認可を求め活動する LGBT 団体であり、同性婚が進んでいない段階から、草案作成や署名活動、同性婚を認めないことは違法であると指摘してきた。このように立法と司法の面で運動を進めていることが分かった。署名活動では 14 万人もの署名を集めたというところから、TAPCPR は血のにじむような努力をされてきたと知り、台湾の平等化に大きく貢献したと感じた。しかし、同性婚が認められたからといって平等に結婚ができるわけではないとおっしゃっていた。同性婚が認められた今でも３つの壁があり、１つは全く関係のない子を養子にはできないことであり、２つ目に同性婚が認められていない国との国際結婚は認められないことである。例えば、同性婚が認められていない日本と台湾では国際結婚ができないという仕組みである。そして３つ目に、異性愛と異なる法案を作成することは差別的ではないかという批判である。同性婚の法案は、同性婚が異性婚とは異なるという差別を助長させているのではないかという意見もあると教わった。私は、台湾は同性婚が成立しているため、すでに平等だと思っていたが、このように同性婚の認可と平等は異なるということが分かった。異性婚であれば難なく通る関門も、同性婚の場合は通過する前に止められてしまうという不平等さを感じた。

以上をまとめると、台湾大学の学生活動の規模や二二八和平公園と西門紅樓、TAPCPR の話から、セクシャルマイノリティの人々にとって過去も現在も生きにくい世界であると感じた。研修前は台湾の成果しか見えておらず、台湾は日本より平等が進んでいると考えていたが、台湾では平等を成立させる上で多くの困難があり、その先にも不平等があることが分かった。また、私自身日本で意識していなかったことを台湾で多く発見することができた。研修に参加する前までは、身の回りの同性間の恋愛やイベントの存在を認知できていなかったが、研修に参加したことで存在を認知することができた。このような個人の意識変化を、集団の意識変化に繋げられると、日本の理想と現実の差を少しでも縮めることができるのではないかと考えた。現実は私たちが進行形で作っているものであるため、これから LGBT 関連のイベントに積極的に参加し、努力を続けたいと思った。

「TAPCPR との交流」

▼ 野末楓夏（生活環境学部情報衣環境学科）

製品や技術が性と向き合うために

・はじめに

今回の台湾研修では、「妊娠・出産」の場となる、なでしこグループの施設を訪問し、脱医療化団体、LGBTQ 団体、さらには台湾大学の学生とも交流した。

私は、性に関連した技術や、性の悩みにアプローチした製品に興味があり、そのような分野に

将来携わりたいと考えている。そこで今回の研修に参加することで、交流を通して、性に関わる製品や技術がどうあるべきか考えた。

このレポートでは、研修を通して考えたことを大まかに、3 つにまとめた。

・一つの選択肢としての技術、製品

性に限らず、悩みを解決する製品や技術はあくまでも一つの選択肢であり、「この手段、技術だけが正しい」というアプローチ方法には問題がある。

なでしこグループのクリニックでは、各分野の医師が在籍し、アプリで母子の健康の管理の手助けが出来るようになっている。さらに費用はかかるが、妊婦やその家族が過ごせる部屋も用意されている。また、なでしこグループの産後療養施設では、体が弱くなった母親や子どもに病気が感染し、広がらないよう、施設へ入る前に厳重に確認される。ほかにも、母子が問題なく過ごせるような仕組みが部屋の室内に多く設置されていた。なでしこグループのクリニックや産後療養施設を見てみると、現代の医療技術がかなり発展していることがわかる。

しかし、脱医療団体の方々と話していた際、初めての出産でも妊婦へあまり説明されないまま、医者の考えで帝王切開を行われることに違和感を抱いている方が多かった。実際、台湾で帝王切開が行われる割合は、WHO（世界保健機関）が各国に求めている帝王切開の割合（10 ～ 15% 以内）を越えているという話を聞いた。他にも、台湾では妊婦が主体となるはずの妊娠･出産で、妊婦が主体とならず医者に言われた通りの生活を行うことに、疑問を持った方もいた。

また、今回の研修で一緒に同行していた学生の方からも、なでしこグループの医療施設に対して「医療が介入しすぎているのではないかと、少し不気味さを感じた」という感想が上がっていた。施設側から「理想的な出産」のイメージを提示されていることへ、違和感を抱く方もいるようだった。

繰り返すようだが、製品や技術は悩みを解決する上での一手段でしかないことが知られるべきだと考える。妊娠や出産を例に挙げると、今回のなでしこグループのように医療を用いた出産から、助産師と一緒に、経験を中心として出産する方法などがある。しかし、台湾では助産師のような存在があまり知られていないと聞いた。この状態のまま医療を提供する側がビジネスだけを重要視してしまっては、不必要に帝王切開のような料金のかかる手術が行われる可能性がある。もちろん、助産師だけでは対応しきれない出産もありえるし、そもそも「病院か助産師」という 2 択だけではない出産方法もあると思われる。大切なのは、それらを使う側が主体的に選べることだと感じた。

・性に関する製品や商品のアプローチ方法

性に対する、モノとしてのアプローチ方法として、私が最初に紹介したものには「使用者の見た目をデザインによって変化させて、使用者の悩みを解決するアプローチする方法」が多い。例えば、私が紹介したブランドの feast は「胸が小さくても魅力的に見えるブラ」を販売しており、blurorange は「男性のような身体つきながらもかわいい服を着こなせるようにデザインされた服」を販売している。この 2 つは、日常生活で一般的に販売されているアイテムと、自分の体型が理想的にマッチしない、という悩みを抱えている人向けの商品である。実際にこち

らの商品を紹介した際、交流した台湾大学の男子学生が「スカートを履いて学内で生活する」という自身の活動も紹介してくださった。新たな価値を提示した製品を通して、他の人と議論も深めることが出来ると感じた。

しかし、性に関する製品や商品は、必ずしも悩みにアプローチする必要はないのかもしれないと感じた。私が LGBT 団体の方に、性に関する製品や商品についてお聞きしたときには「レインボーカラーを主張したアイテム」などが紹介された。LGBT 団体の方は、「最初はこのようなアイテムを身に付けるのは少し恥ずかしいかもしれないが、付けていくうちに考えが定着していく」とおっしゃっていた。このように、性に関するアイテムを作る際には、自分の考えを主張する手助けになるアプローチ法もあると感じた。使用者の物理的な影響をあまり受けないため、どんな人でも気持ちさえあれば使用できることが強みと言えるだろう。また、悩みにアプローチした製品が既存のジェンダー観や偏見を助長する可能性もある。

・性の悩みと法や社会

性に関する深刻的な悩みには法が関係している場合もある。例えば、今回お会いした LGBT 団体の方々は、「台湾では同性婚が認められたものの、未だすべての人たちが平等に結婚することはできない」というお話をしてくださった。そして、結婚の多様化や平等、保護を実現するために、多くの方の賛同を得られるように活動していると聞いた。

団体の方々のお話を聞き、性の悩みを深く理解するには、法を調べ、社会的な現状を把握することも大切だと改めて感じた。そのためにも、新しい考えや動きにも敏感になる必要もあるだろう。

また、今回は台湾にある女性に関した本屋にも訪れた。本は新たな価値に出会う、良いきっかけになり得る。日本にも性に関した本や製品をメインに扱ったお店が増えれば、社会的な変化も起きやすくなるのではないだろうか。

・終わりに

今回の台湾研修を通して、製品開発には、ただ悩みを技術で解決するのではなく社会的な背景なども把握する必要があると考えた。アイテムを通して新たな視点や価値を提示する場合、作る側はもちろん、享受する側にも広い知識と視野を持つことが重要だ。そのためにも、製品開発に並行して広い知識と視野を持てる環境の構築も必要ではないだろうか。

シンポジウム

游鑑明教授特別講演会「オーラルヒストリーとジェンダー研究」要旨

オーラルヒストリーは、女性史／ジェンダー史などの文献資料が乏しい分野においては、その間隙を埋める重要な研究手法として位置づけられている。台湾の中央研究院近代史研究所の游鑑明教授は、研究所の仕事として、また自身の研究の必要上、これまでに多くのインタビューに関わってこられた。本センターでは、2019 年 6 月 18 日（火）に游教授をお招きし、その経験と課題についてご講演いただいた。共催は文学部ジェンダー言語文化学プロジェクト、日本アジア言語文化学会。以下はその講演要旨である。

◇インタビュー記録におけるジェンダー

インタビュー記録の中の出自や幼少期の回想、結婚生活の内容には、ジェンダーに関わるものが多い。一見、ジェンダーとは無関係に思われる事柄についての語りであっても、そこにはジェンダー権力構造が見られる場合がある。これまで私が出版したインタビュー記録と近代史研究所が出版したものを用いて、インタビュー記録におけるジェンダーについて分析していく。

◇父権制（patriarchy）とエンパワーメント

女性が父権や夫権に支配される現象は、昔から存在し、そのため父権制はフェミニストから批判されてきた。しかし、時には女性をエンパワーする男性もいる。

英米文学の第一人者の朱立民氏はインタビュー中で両親の結婚に触れ、「父がまず母にさせたのは、纏足をほどき、できるだけ自然の足にもどすこと。二つ目は文字を学ぶこと。母はとても賢い人なので、ほどなくして新聞を読めるようになりました」と語っている。

また、女子教育家の邵夢蘭女史は、インタビューで、父が祖母の反対を押し切って彼女に纏足をさせなかったと語っている。彼らは夫権や父権によって女性を支配したともいえるが、一面では女性が教育を受ける権利、女性身体の自主権を啓いたともいえる。

◇能力の発揮から男女平等の獲得へ

一族の力や財産を後ろ盾として、家を治める権利を付与された女性もいる。先に挙げた邵夢蘭女史は大伯母の紛争解決の才について語ってくれた。大伯母は郷里で難しい紛争があるたびに、調停人として呼ばれ、輿が迎えに来たという。

自ら能力を発揮する女性は、職場が女性に開かれた後、さらに増えた。男女同権を獲得するために男性の権威に挑戦した女性もいる。初の女性少将で、中国のナイチンゲールと呼ばれた周美玉女史は、インタビューで、学歴でも職歴でも他人に引けをとらないのに、看護学科や女性というだけで差別待遇を受けたと感じ、毎年男性上司に申し立てをしていたと語ってくれた。

林蔡素女女史は省の婦女会の理事長になった頃、国語（中国語）が話せないことで嘲られた。そのため、毎日テレビを見て必死で国語を学んだと語っている。

◇婚姻におけるジェンダー関係

婚姻には最もジェンダー関係が現れやすい。台湾では戦後の混乱の中、婚姻を自主選択した女性もいる。

社会事業家の姜允中女史はインタビューで、大陸から台湾に来た頃は一心に道徳会や幼児教育に貢献することを考え、独身を貫くつもりだったが、独身女性が団体の中で何か

をしようとしても、噂の的となりやすく、そのため大陸に妻がいる王鏡仁氏に自ら交際を申し込み、将来もし大陸に戻ることになったら、王鏡仁氏を元の妻と復縁させ、自身は独立や自尊を保ち、仕事を続けることにしようと考えたと語ってくれた。

◇小結

オーラルヒストリーには豊富なジェンダー関係の史料が埋もれている。様々な世代・職業・地域・階層のインタビューイーは、研究者に比較の視野を与え、ジェンダーの課題を分析する際に、一面的で単純な結論ではなく、多重的・多様的な論を生み出させてくれる。口述史料の多様性は、ジェンダーステレオタイプを転覆させる可能性をもつのだ。

（野村鮎子）

游鑑明教授

シンポジウム

「アジアから問うジェンダー史――世界史を読み替える」―新たな挑戦に向けて

ジェンダー視点は、歴史の見方を変える。国家・市場・外交といった「大きな物語」の読み替えを迫る。今回のシンポジウムはそうした試みの一つであり、新たな挑戦をはかるための礎石としての意味をもつ。

2019 年 12 月 14 ～ 15 日の２日間にわたり、比較ジェンダー史研究会（https://ch-gender.jp/wp/）は、奈良女子大学アジア・ジェンダー文化学研究センターと共同でシンポジウムを主催した。学内外から多くのご参加をいただき、成功裡に終わった。ご協力いただいたみなさまに心から感謝申し上げたい。

比較ジェンダー史研究会は、2014-15 年に『歴史を読み替える』全２巻（世界史篇・日本史篇）を編集し、高校歴史教育で活用できるジェンダー史教材を公刊した。2015 年には科研費（A）を取得して共同研究を深めることとした。そのさい、「身体」や「性」から出発し、「家族」や「国家」、そして「グローバル社会」へという視点から歴史を読み解いていくことを目指した。さらに議論をするなかで、「アジア」への着目と高校新必修科目「歴史総合」への対応の必要性を痛感するに至った。本シンポジウムは、こうした取り組みの総括とも言えるものである。

初日のミニ・シンポジウム「関係性の世界史――ジェンダー視点から問う文化と身体」は、２部構成をとった。「第１部：文化と覇権構造――ジェンダー視点から」と「第２部：見られる身体・見せる身体――ジェンダー視点から」である。２日目は、国際シンポジウム「アジアから問うジェンダー史――世界史を読み替える」と題し、多くの講演と全体討論を行った。基調講演者としてお招きしたのは、カリフォルニア大学教授 Gail Hershatter さん（中国史）と京都大学教授落合恵美子さん（歴史社会学）のお二人である。あるエリート家族に生まれた女性の人生を大きな歴史的変動のなかで読み解いていく Hershatter 教授の研究も、アジア近代社会の特徴を説明するための理論を立てようとする落合教授の試みも、いずれもたいへん刺激的な問題提起を含んでいた。

午後の部は、２つのセッションで構成した。「アジアの多様性から問うジェンダー史の可能性」と「歴史教科書をジェンダー視点で検討する―アジアを中心に」である。イスラームやモンゴルを取り上げてアジアが広範な地域を含み、文化的・宗教的に多様であることを再認識するとともに、お二人の高校教員にご参加いただいて世界史教育現場から浮かび上がる課題を共有することができた。

いま、比較ジェンダー史研究会は、新しい挑戦として、『「ひと」から問う世界史』全３巻の編集を準備している。第１巻『「ひと」とはだれか――身体・セクシュアリティ・ジェンダー』、第２巻『「社会」はどう作られるか？――社会の構成原理とジェンダー』、第３巻『「世界」をどう問うか？――地域・戦争・環境』である。今回のシンポジウム成果もそのなかに盛り込む予定である。

女性というアイデンティティもアジアというアイデンティティも、奈良女子大学存立の根幹に関わる。こうしたアイデンティティを存分に発揮し、大学とここで学ぶ学生たちの揺るぎない個性を形作るのは、ジェンダーという視点であろう。ジェンダー視点は、女性たち

をエンパワメントするためにも、LGBTQの尊厳をはかるためにも、そして学生・教員の交流を通じてアジアの「内からの連帯」をはかるためにも欠かせない。研究・教育・大学行政のすべてにわたって、ジェンダー視点から問いかけ、解決策を探り、地域と世界に向けて提案するために、奈良女子大学が果たすべき役割は大きい。奈良女子大学アジア・ジェンダー文化学研究センターが、ジェンダー研究の学内拠点であるにとどまらず、アジアから世界に向けてジェンダー視点から問いかけをなすためのネットワーク拠点としてますます発展することを期待している。

（三成美保）

アジアから問うジェンダー史

奈良女子大学文学部言語文化学科「ジェンダー言語文化学プロジェクト」主催
アジア・ジェンダー文化学研究センター／神戸女学院大学女性学インスティチュート共催

「左翼運動と女性作家―雑誌『女人芸術』にみる運動の周縁」

今年度も文学部言語文化学科「ジェンダー言語文化学プロジェクト」との共催行事として、講演会を開催した。今回は神戸女学院大学女性学インスティチュートとの共同企画とし、同大学文学部の笹尾佳代氏に「左翼運動と女性作家―雑誌『女人芸術』にみる運動の周縁」というタイトルでご講演をいただいた。

1928年に女性作家を育てる目的で、長谷川時雨が主宰者となって発刊された『女人芸術』は、ほぼ同時代の雑誌『青踏』(1911-1917)に比べると知名度は高くないが、多くの女性作家のデビューの場となった。笹尾氏は『女人芸術』という「場」に集った女性たちの熱意の源泉から話を始められ、プロレタリア文学との親和性や創作における特徴(「自己変革」「覚醒」「プチブル的自己淘汰」などがキーワード)へと論を進め、最後に大田洋子の小説「火群」や平林英子の「最後の奴隷」を分析しながら、「運動周縁の物語／共闘の困難」について述べられた。同じ雑誌に集いつつ、ジェンダー的にも社会闘争における立ち位置についても、多様に差異化される女性作家の在り様について、示唆に富んだ指摘をされた。

続いて、髙岡尚子(奈良女子大学)がフランス文学研究の立場から、『女人芸術』に連載された長編翻訳小説『みちづれ』(Victor Margueritte著*Le Compagnon*)がなぜ掲載されるに至ったか、時代背景や翻訳者(望月百合子)に触れつつ、分析を提示した。最後に、吉川仁子氏(奈良女子大学)の司会で来場者とのディスカッションを行い、『女人芸術』に関する議論を深めた。会場であるN201教室には、学生や他大学からの来学者も含めて、50名ほどの熱心な参加者が集った。

(髙岡尚子)

アジア・ジェンダー文化学研究センター主催
文学部言語文化学科ジェンダー言語文化学プロジェクト共催

ジェンダー講読セミナー：ジョルジュ・サンド『ガブリエル』を読む

アジア･ジェンダー文化学研究センターは、11月22日に国際シンポジウム「女性・文学・歴史」を開催したが、翌週11月27日には、シンポジウムにご登壇いただいたMartine Reid（マルティーヌ・リード）教授（フランス リール大学）が2019年に刊行されたジョルジュ・サンドの戯曲『ガブリエル』の新版を元に、同作品を読み直す購読セミナーを開催した。

セミナーには、リード教授（*Gabriel* de George Sand : L'importance du contexte「ジョルジュ・サンド『ガブリエル』：コンテクストの重要性」）のほか、坂本千代氏（神戸大学教授）による「L'Education et l'ambiguïté du genre dans *Gabriel* de George Sand　ジョルジュ・サンドの『ガブリエル』における教育とジェンダーのあいまいさについて」、髙岡尚子（奈良女子大学）による「Gabriel (le) : le « moi » ambigu dans *Gabriel* de George Sand　ジョルジュ・サンド『ガブリエル』におけるジェンダーと主体の問題」という３名のジョルジュ・サンド研究者が、本作品についての読解モデルをフランス語で提示した。

女性に生まれながら、名家の跡継ぎにするべく男性として育てられた主人公ガブリエルの数奇な運命について、教育や自己の認識に注目しながら、社会的に要請されるジェンダーの視点をもとに論じる今回の試みは、非常に刺激的なものであった。フランス語のテクストを用いた、フランス語による講演であったため、参加者は15名程度と少なかったが、講演会後には多くの質問が出され、活気のあるイベントとなった。

（髙岡尚子）

2019 年度　第 14 回女性史学賞授賞式

奈良女子大学は、歴史家の脇田晴子氏が創設した「女性史学賞」を、2017 年度以降、大学として引き継ぎ、アジア・ジェンダー文化学研究センターが受賞作を表彰している。「女性史学賞」は、女性史・ジェンダー研究の進展に寄与する優れた単著に与えられる賞で、2019 年度（第 14 回）は、北村紗衣氏の『シェイクスピア劇を楽しんだ女性たち―近世の観劇と読書』（白水社）が受賞した。

当日は大学記念館に、創設者の脇田晴子氏のご子息 脇田成氏をはじめ、選考委員、マスコミ関係者など多くの来場者が参集した。冒頭の今岡春樹学長による挨拶の後、受賞者の北村氏に賞状と副賞が贈呈された。

その後、選考委員を代表して姫岡とし子氏（東京大学名誉教授）による受賞作に関する講評がなされた。シェイクスピアの膨大な数の刊本に当たり、そこに残された蔵書票や書き込みなどを手掛かりに執筆された本書について、高い評価が与えられるとともに、歴史研究の視点からのコメントがなされた。

続いて、北村氏による受賞作に関する講演が行われた。講演は、著作の内容に従って、「シェイクスピアの時代の観客たち」「シェイクスピアの本をたずねて」「世界最初のファン大会と女性たち」の順に進められた。その過程において、シェイクスピアの同時代から女性たちが観劇や読書を楽しみ、作品の正典化にいかに関わっていたかが明らかにされた。なかでも「ファンダム」と呼ばれる、作家・作品の「ファン」ソサイエティ文化に注目した動向分析は、非常に興味深いものであった。

その後、北村氏の東京大学時代の指導教員であった河合祥一郎氏（東京大学教授）より、本書と研究内容に関するコメントがなされた。河合氏はシェイクスピア研究における女性像の分析やフェミニズム批評の歴史について整理された後、北村氏の研究がそこに占める位置と役割の重要性に言及された。

最後に、フロアの参加者を交えての質疑応答が行われた。約 30 分間に、研究者や学生などさまざまな参加者から活発な質問が出され、北村氏がひとつひとつ丁寧に回答された。ヨーロッパ各国との影響関係や相違、当時の劇場で観劇を楽しんだひとびととその風俗、また、19 世紀・20 世紀になって女性によるシェイクスピア受容がどのように変化していったかなど、多岐にわたる質問に、会場は大いに盛り上がった。

（髙岡尚子）

2020 奈良女子大学女性教員数

理学部　安田恵子

2019 年度学校基本調査では、全国の大学教員数は 187,862 人、そのうち女性教員数は 47,618 人 25.3%である。年々緩やかではあるが上昇を続けており、2019 年度女性教員数は前年度より 1,124 人増加し、過去最高値を更新した。これまでの女性教員数の増加に向けた様々なアクションプランの成果が現れてきたと考えられる。アジア・ジェンダー文化学研究センターでは、1993 年から奈良女子大学の女性教員数を調査してきており、今回は 2020 年の女性教員数について報告する（図 1. 表1）。

2020 年 1 月 31 日現在の奈良女子大学の教員数は 188 名、そのうち女性教員数は 69 名、36.7%であった。各学部の女性教員比率を見ると、生活環境学部では 50.8%で、調査開始当初から変わらぬ高値を示している。文学部は 35.2%、理学部は 26.7% で、それぞれ 2010 年から緩やかながらも年々上昇してきている。しかし、全学の女性教員比率は全国の女性教員比率 25.3%より高い値であるものの、2015 年から女性教員比率はほぼ横ばいになっているようである。本年度本学は文部科学省科学技術人材育成費補助事業ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ（牽引型）に採択され、武庫川女子大学、奈良工業高等専門学校、株式会社プロアシスト、帝人フロンティア株式会社、佐藤薬品工業株式会社と連携し、研究環境の整備、女性研究者の研究力向上、女性研究者の裾野拡大を目指してさまざまな取組みを策定し、この取組を奈良から関西、全国に向けて波及させるために活動を開始している。この取組を通し女性研究者の研究力が向上し、女性教員数の増加に繋がることが期待される。

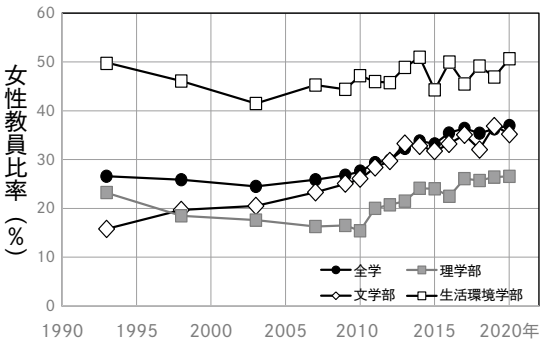


図 1 奈良女子大学女性教員比率の変動

表 1 奈良女子大学における女性教員数・男性教員数

2020.1.31 現在

文学部		
学科	女性教員数	男性教員数
人文社会学科	6（30.0%）	14（70.0%）
言語文化学科	12（52.2%）	11（47.8%）
人間科学科	1　（10.0%）	10（90.0%）
	19（35.2%）	**35（64.8%）**

理学部		
学科	女性教員数	男性教員数
数学科	4（30.8%）	9（69.2%）
物理科学科	4（20.0%）	16（80.0%）
化学科	3（17.6%）	14（82.4%）
生物科学科	6（33.3%）	12（66.7%）
環境科学科	3（42.9%）	4（57.1%）
	20（26.7%）	**55（73.3%）**

生活環境学部		
学科	女性教員数	男性教員数
食物栄養学科	8（61.5%）	5（38.5%）
心身健康学科	10（62.5%）	6（37.5%）
情報衣環境学科	2（16.7%）	10（83.3%）
住環境学科	5（41.7%）	7（58.3%）
生活文化学科	5（83.3%）	1（16.7%）
	30（50.8%）	**29（49.2%）**

全学教員数　188
女性教員数　69（36.7%）
男性教員数 119（63.3%）

＊教員は学部に所属する教授、准教授、講師、助教とした。